

デミング賞のしおり



デミング賞とは、戦後の日本に統計的品質管理を普及し、日本製品の品質を世界最高水準に押し上げた大きな礎となった故William Edwards Deming 博士の業績を記念して1951年に創設されたTQM（総合的品質管理）に関する世界最高ランクの賞です。

2014

デミング賞委員会

Dr. William Edwards Deming

デミング博士は、1900年10月14日アメリカ合衆国アイオワ州スー市（Sioux City）に生まれ、ワイオミング大学を卒業後、大学講師、米国農務省技師、連邦標準局講師、陸軍長官顧問、ニューヨーク大学教授などを歴任され、その後諸官庁、諸会社の統計コンサルタントや品質管理の指導者として活躍されました。

博士は、統計学、とくにサンプリングの理論と実際の世界的権威であり、また、アメリカにおける統計的品質管理創始者の1人で、1950年以降わが国における統計的品質管理の進歩発展に多大の貢献をされ、その功績に対し、日本政府から1960年に勲2等瑞宝章が贈られました。

博士は、1993年12月20日老衰のため93歳の生涯を閉じられました。

表紙：デミング賞受賞者に授与されるデミングメダルでデミング博士の横顔と
"THE RIGHT QUALITY & UNIFORMITY ARE FOUNDATIONS OF COMMERCE,
PROSPERITY & PEACE"という博士の言が記されています。
故山脇洋二氏（元東京芸術大学教授）のデザインによるものです。

※2013年度しおりからの改訂箇所は色文字で表記しています。

も く じ

1. デミング賞創設のいきさつ	3
2. デミング賞の種類	3
3. デミング賞とわが国の品質管理の発展	4
4. デミング賞の組織と運営	6
5. デミング賞各賞と日経品質管理文献賞について	7
(1) デミング賞本賞	8
デミング賞本賞とは	8
(2) デミング賞普及・推進功労賞（海外）	9
デミング賞普及・推進功労賞（海外）とは	9
(3) デミング賞	10
デミング賞とは	10
評価基準	12
合格判定の方法	17
期待できる効果	18
受賞による効果－受賞組織のトップのことば	20
(4) 日経品質管理文献賞	23
日経品質管理文献賞とは	23
6. デミング賞委員会委員によるTQM診断	24
◇デミング賞に関する諸規定	25
◇応募・推薦申込書	31
デミング賞本賞推薦書	33
デミング賞普及・推進功労賞（海外）推薦書	35
日経品質管理文献賞推薦（応募）申込書	37
TQM診断申込書	39
◇お問い合わせ先	41

1.デミング賞創設のいきさつ

アメリカにおける品質管理の優れた専門家の一人であった故W.E.Deming博士（1900～1993）は、1950年6月15日、財団法人日本科学技術連盟（略称：日科技連）の招きにより来日されました。

東京・神田駿河台の日本医師会館講堂で、博士による「品質の統計的管理8日間コース」のセミナーが開催され、連日博士による講義が行われました。引き続いて、箱根では「経営者のための品質管理講習会1日コース」のセミナーが行われました。これらのセミナーで、博士は、わが国産業界の経営者、管理者、技術者、研究者に統計的品質管理の基本を平易に懇切に講義され、受講者に深い感銘を与えるとともに、揺籃期にあったわが国の品質管理の成長に大きな影響を与えました。

博士の8日間コースの講義は、速記によって記録され、“Dr. Deming’s Lectures on Statistical Control of Quality”の書名で有料配付されましたが、博士は、この講義録の印税を日科技連に寄付されました。日科技連の故小柳賢一専務理事は博士のご厚意に感謝し、博士の友情と業績を永く記念するとともに、わが国の品質管理の一層の発展を図るために、この講義録の印税を基金としてデミング賞の創設を日科技連の理事会に諮りました。この提案は理事会で満場一致で承認され、デミング賞の制度が設立されることとなりました。

その後、デミング博士の著書「Some Theory of Sampling」が日本語に翻訳、出版されましたが、博士からさらにこの著書の印税の一部の寄付があり、デミング賞の基金に加えられました。こうした経緯を経て、デミング賞は大きく発展しました。現在、この賞を維持するための経費はすべて日本科学技術連盟によって負担されています。

2.デミング賞の種類

デミング賞には、下の図に示すように、個人またはグループを表彰するデミング賞本賞、デミング賞普及・推進功労賞（海外）および企業・組織を表彰するデミング賞（これまでのデミング賞実施賞）、デミング賞大賞（これまでの日本品質管理賞）があります。

デミング賞本賞

対象：個人またはグループ

「TQM」の研究に関し優れた業績のあった者、またはTQMの普及に関し優れた業績のあった者に授与する。

デミング賞

対象：企業、機関、事業部、事業所、本部などの組織（以下、組織という）※

経営理念、業種、業態、規模、経営環境にふさわしいTQMが効果的に実施されている応募組織に授与する（年度賞）。

デミング賞普及・推進功労賞（海外）

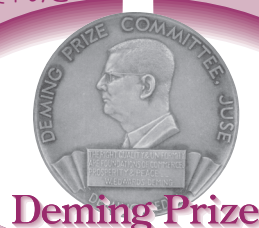
対象：主たる活動が海外に限定される個人

「TQM」の普及・推進に関し、優れた業績のあった者に原則として3～5年ごとに授与する。

デミング賞大賞

対象：デミング賞またはデミング賞大賞を受賞し、3年以上経過した組織

デミング賞またはデミング賞大賞のレベルを3年以上にわたり維持・向上してきた応募組織に授与する（年度賞）。



Deming Prize



※2012年に「デミング賞実施賞」は「デミング賞」、「日本品質管理賞」は「デミング賞大賞」にそれぞれ名称が変わりました。
※デミング賞大賞の応募の詳細につきましては「デミング賞大賞のしおり」をご覧ください。

3.デミング賞とわが国の品質管理の発展

デミング賞が、直接、間接的に日本の品質管理の発展に与えた影響は、はかり知れません。

デミング賞に挑戦された組織は、そのときどきの経営環境に応じた、時代が要求する新たな品質管理（「品質経営」といってもよい）を模索し、自らの組織にとって効果的な品質管理の方法を開発して、それを仕組みとして構築し、実践してきました。

自ら挑戦した組織にとって、それは、品質管理によるレベルの向上とともに経営的に成功することができるという「経営における一つの理念」を実感する貴重な体験であります。それらの組織の方法論に啓発され、新たに品質管理に取り組む他の組織にとっては、品質管理が経営における成功の重要要因であることの実証を目の当たりにし、賞への挑戦は数々の有益な方法論を学ぶことができる絶好の機会であります。こうした波及効果が品質管理の方法そのものの発展を促し、組織におけるレベルの高い実践を生むことにつながってきています。

こうした自己成長を促すメカニズムは、デミング賞における審査の仕組みにあったといえます。もっともそれは、デミング賞の採点基準が不透明・不明確という指摘を受ける一つの要因にもなりました。そこで、現在ではより審査の透明性を高め、デミング賞の意図するところをわかりやすく伝えるために、「評価基準」を明示いたしております。

しかし、審査そのものは、それぞれの組織の状況を反映したものとすべきであるとの基本的な考え方は変わってはおられません。

デミング賞の審査は、デミング賞委員会が提示する品質管理のモデルへの適合を求めるのではなく、自ら状況認識をし、課題と目標を定め、組織をあげた改善・改革を行った結果とその過程、そして将来にわたる有効性を評価しようとするものです。審査委員は、その組織の実状にあった課題が設定され、その組織の実状にふさわしい取り組みがなされてきたか、その活動により、将来より高い目標達成の可能性が期待しうるかを審査することに努めています。

デミング賞委員会は、デミング賞審査をいわゆる「審査」というよりも「相互啓発」と考えています。もちろん審査は第三者の委員によって行われますが、その判定はTQMに対する取り組みの姿勢、運営の状況、得られた成果などを総合的に判断することによってなされます。デミング賞委員会が問題を出すのではなく、問題も対応も受審する側が用意するという意味であり、ここに発展の要因があります。

このようにして、構築された日本のTotal Quality Control（TQC：全社的品質管理）は1980年代米国へ逆移転され、米国組織の復活に大きな役割を果たしたといわれています。「日本のTQC」は欧米では訳語としてTotal Quality Management（TQM：総合的品質管理）とされ、日本でも国際慣行にしたがって1996年にTQMと呼ぶことにしました。

この変革の時代に安易な道などありません。他人から与えられた問題に解答するだけで優れた品質マネジメントシステム、経営システムが構築できるとは思えません。自ら考え、自ら高い目標をおき、自ら挑戦する、デミング賞は、そのようなTQMを計画し、実践しようとする組織の経営改善・改革の道具になりうることをねらいとしているものであります。



Deming Prize

デミング賞委員会というTQMとは次の定義に示すものをいいます。

TQM (Total Quality Management) の定義 (2009年10月改訂)

主 文

顧客の満足する品質を備えた品物やサービスを適時に適切な価格で提供できるように、全組織を効果的・効率的に運営し、組織目的の達成に貢献する体系的活動。

解 説

1. 「顧客」：買い手のみでなく、使用者、利用者、消費者、受益者などの利害関係者を含む。
2. 「品質」：有用性（機能・心理特性など）、信頼性、安全性などを指すが、第三者や社会・環境・次世代への影響を考慮する必要がある。
3. 「品物やサービス」：製品（完成品のみでなく部品や材料を含む）やサービスとともに、システム、ソフトウェア、エネルギー、情報など顧客に提供されるすべてを含む。
4. 「提供」：「品物やサービス」を生み出し顧客に渡すまでの活動、すなわち調査、研究、企画、開発、設計、生産準備、購買、製造、施工、検査、受注、輸送、販売、営業などのほか、顧客が利用中における保全やアフターサービスおよび利用後の廃棄やリサイクルにかかわる活動をも含む。
5. 「全組織を効果的・効率的に運営」：適切な組織・経営管理のもとで、品質保証システムを中核として、原価、量、納期、環境、安全などの諸管理システムを統合し、できるだけ少ない経営資源で迅速に組織目的を達成できるように全部門、全階層の全員で仕事を進めていくことをいう。このためには、人間性尊重の価値観のもとに、コア技術・スピード・活力を支える人を育成し、プロセス・業務に対し、統計的手法などを適切に用いて、事実に基づき、計画・実施・評価・処置（PDCA）の管理・改善を実施すること、さらに適切な科学的手法や情報技術の有効活用により経営システムの再構築を図ることが必要となる。
6. 「組織目的」：顧客満足 of 恒久的・継続的実現を通し、組織の長期的適正利益の確保と成長を目指す。従業員満足とともに社会・取引先・株主等の事業に関係するすべての人々の便益の向上を含む。
7. 「体系的活動」：組織の使命（目的）を達成するために、明確な中・長期的なビジョン・戦略および適切な品質戦略・品質方針を定め、経営トップ層の強い使命感と強力なリーダーシップのもとに行う組織的な活動をいう。

▼それぞれの組織において、その組織にもっとも適した経営を行うことが、デミング賞を受賞する最短経路です。デミング賞を受賞するためにといって、本来の経営から見て不必要なことを実施することは好ましくありません。それは、受賞のためにプラスにならないどころか、マイナスになる可能性があります。

▼審査にあたっては、業種や規模などに応じたTQMがいかに工夫され実施されているかを重視します。すべての応募組織に一律・画一的な進め方を要求するものではありません。

▼形式のみを模倣したり、必要以上の規定・標準を整えたりするだけの活動は、仮にTQMという名称のもとに活動が行われていても、賞を授与する対象となりません。

▼一部に「デミング賞に合格するためにはレベルの高い統計的手法を用いなければならない」というような声がありますが、それは誤解です。

▼応募組織の実態に適した新しい活動が含まれていれば、それは高く評価されます。

4.デミング賞の組織と運営

デミング賞の審査、授与、運営はデミング賞委員会が行っています。委員長は慣例として社団法人経済団体連合会会長が就任しています。委員は産学のTQMの見識者で構成されています。

委員会には、運営委員会と3つの委員会が設けられ、審査その他の業務を分担審議しています。デミング賞委員会の事務は、日本科学技術連盟事務局が処理し、同連盟事務局長が委員会のセクレタリーとして事務を統括しています。

デミング賞委員会ならびに各委員会の役割

デミング賞委員会

- 【役 割】** 応募または推薦による候補者の中から各委員会の審査報告に基づき受賞者を決定
【委員長】 日本科学技術連盟会長または日本科学技術連盟理事会の推薦する者があたる
【委 員】 TQMに関係のある学識経験者、または企業の役職員、その他の中から委員長が委嘱した者（約170名）

運営委員会

- ①運営および総合企画、基本理念・基本戦略の策定
- ②デミング賞諸事業の調整と、審査・褒賞などの改善などに対し広く意見を聞き委員会に報告
- ③デミング賞に関する規定やシステムなどを検討し、必要な改正を委員会に提案

本賞選考委員会

デミング賞本賞、デミング賞普及・推進功労賞（海外）の受賞候補者の審査・選定

デミング賞審査委員会

デミング賞大賞（旧：日本品質管理賞）、デミング賞の受賞候補組織の審査・選定。また、デミング賞委員会委員によるTQM診断*の実施

日経品質管理文献賞選考委員会

日経品質管理文献賞の受賞候補者の審査・選定

注）* TQM診断については本しおりp.24をご覧ください。



5.デミング賞各賞と日経品質管理文献賞について

- (1) デミング賞本賞
- (2) デミング賞普及・推進功労賞（海外）
- (3) デミング賞
- (4) 日経品質管理文献賞

- ◆ デミング賞委員会は、デミング賞各賞候補者の推薦または応募を歓迎します。
- ◆ デミング賞は、各賞とも推薦または応募の受付、審査、授与は1年に1回です。
- ◆ デミング賞の審査は、委員のボランティアで行われており、審査料は必要としません。
ただし、申込金をいただきます。これは審査の事務経費の一部に充当します。実地調査のための審査委員の交通費と宿泊費および審査の意見書作成費、受賞報告講演会資料作成費などの実費は、応募組織に負担していただきます。
- ◆ デミング賞の応募をお考えの組織は、「デミング賞応募の手引き」をご覧ください。
- ◆ その他、ご不明な点は、巻末のデミング賞委員会事務局までお問い合わせください。

(1)

デ
ミ
ン
グ
賞
本
賞

デミング賞本賞とは

デミング賞本賞は、

- a) 「総合的品质管理（以下、TQMという）」の研究に関し優れた業績のあった者
または、
b) TQMの普及に関し優れた業績のあった者
に対して授与される年度賞です。

デミング賞本賞は、デミング賞委員会委員から推薦のあった者を候補者として選考が行われます。ただし、候補者の主たる活動が海外に限定される場合には賞の対象とはなりません。

受賞者には賞状とメダルが授与されます。また、日本経済新聞社から副賞として、賞金50万円が贈呈されます。

推薦方法

締め切り：7月31日*

巻末の推薦用紙に所要事項をご記入の上、業績の記録（A4版3枚以内）を添えて、提出してください。

推薦の締め切りは、7月31日です。

（*当日が土曜日または日曜日の場合は次の月曜日となります。このルールは他の提出期限等についても適用されます）

選 考

提出いただきました業績の記録等の資料を参考に、デミング賞本賞選考委員会で受賞候補者を選定し、デミング賞委員会に報告します。

受賞者の決定

－10月中旬－

デミング賞委員会が、本賞選考委員会からの報告に基づき受賞者を決定し、受賞者に通知します。

受賞者の発表

－10月中旬－

上記デミング賞委員会において受賞者を決定後、受賞理由とともに公表いたします。

受賞者は、

- a) 「日本経済新聞」または「日経産業新聞」
 - b) 「日科技連ニュース」（日本科学技術連盟機関誌）
 - c) クオリティマネジメントWeb版
 - d) 日科技連ホームページ
- 等に掲載されます。

授 賞 式

－11月中旬－

デミング賞委員会から賞状およびデミング・メダルが、また日本経済新聞社から副賞（賞金50万円）が授与されます。

受賞報告講演会

－11月中旬－

授賞式後に、受賞者による報告講演が行われます。

(2) デミング賞普及・推進功労賞（海外）

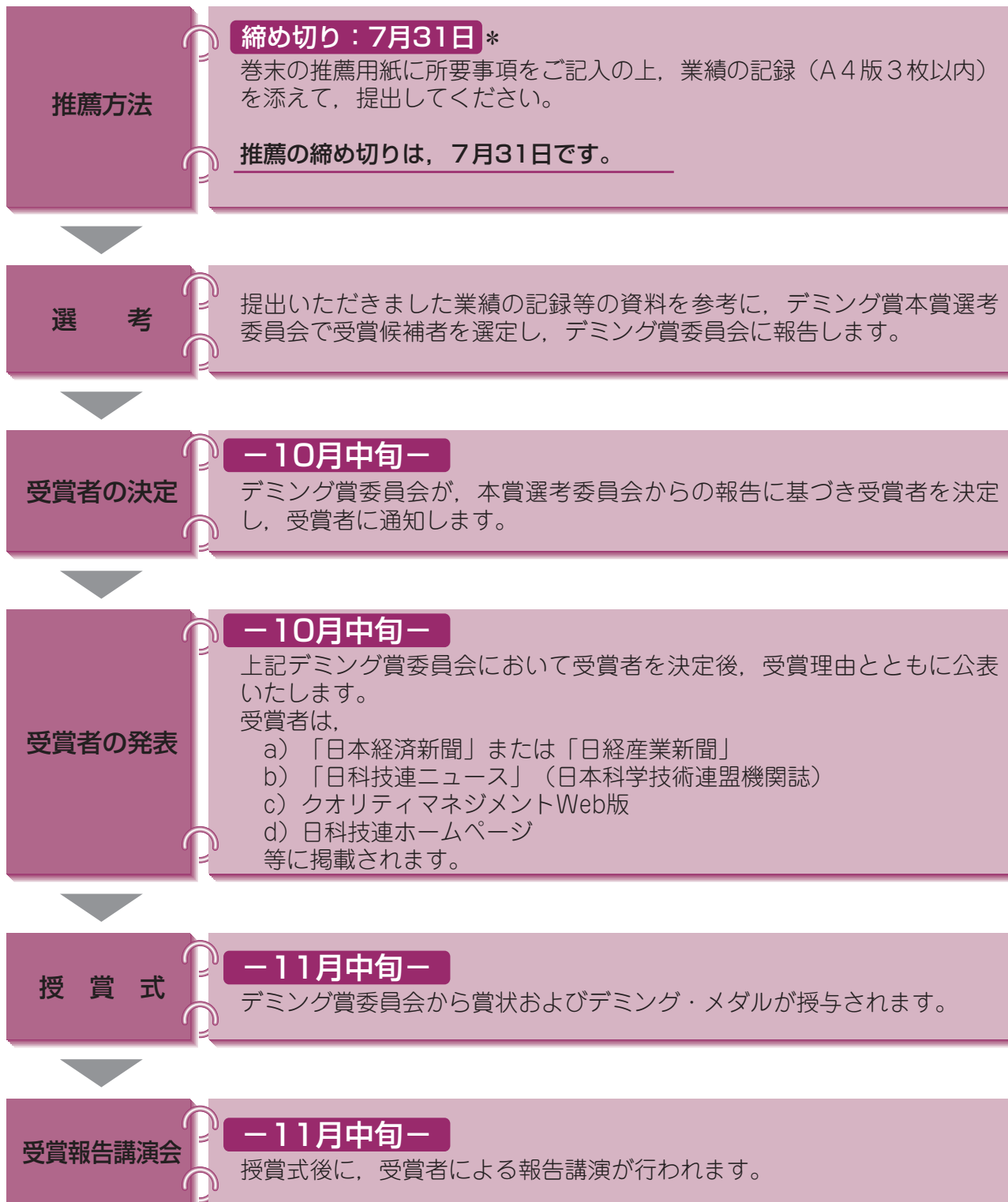
デミング賞普及・推進功労賞（海外）とは

デミング賞普及・推進功労賞（海外）は、総合的品质管理（TQM）の普及・推進に関し、優れた業績のあった者に対して授与されるものです。

この賞の候補者は、主たる活動が海外に限定される者に限られます。

この賞はデミング賞委員会委員から推薦のあった者を候補者として、**原則として3～5年ごと**に選考が行われます。

受賞者には賞状とメダルが授与されます。



現行のデミング賞本賞は、左記のとおりとなっています。ここでの「ただし、候補者の主たる活動…」の条項のため、a) に関しては外国人に受賞のチャンスはいくらかありますが、b) に関しては外国人の受賞は不可能に近いと考えられます。基本的に、デミング賞本賞は日本人対象の賞といえます。

デミング賞が国際的なものになりつつある現在、このデミング賞本賞に相当するもので、日本人以外の人を主たる対象とした賞を創設したい。これがこの賞の新設の背景であります。

(3)

デ
ミ
ン
グ
賞

デミング賞とは

デミング賞は、経営理念、業種、業態、規模、経営環境にふさわしいTQMが効果的に実施されている応募組織に対して授与される年度賞です。一定の条件を満たせば、業種、規模の大小、公・私、国内・海外、組織の一部・全体を問わず応募できます。

各年度に賞を授与する組織数に制限は設けられていませんので、審査の結果、合格点に達していると認められた組織すべてにデミング賞が授与されます。

デミング賞を受賞できる組織とは

経営理念、業種、業態、規模、経営環境にふさわしいTQMが効果的に実施されている応募組織に授与されます。

- a) 経営理念、業種、業態、規模および経営環境に応じて、明確な経営の意思のもとに、積極的な顧客指向の経営目標・戦略が策定されていること
- b) a)の経営目標・戦略の実現に向けてTQMが適切に実施されていること
- c) b)の結果として、a)の経営目標・戦略について効果をあげていること

について、「評価基準」をもとに審査が行われ、賞を授与するかどうか決定されます。

応募方法

締め切り：2月20日

別冊「デミング賞応募の手引き」の巻末にあります応募用紙に所要事項をご記入の上、所定の資料と申込金*を添えて提出してください。

応募の締め切りは、2月20日です。

*2009年度から応募申込み締め切り日を2月20日に変更しております

審査

審査は、デミング賞審査委員会が行います。
応募組織から提出していただくTQM実情説明書**を参考として実地調査***を行います。
評価基準に基づいて判定を行い、その結果をデミング賞委員会に報告いたします。
審査の過程はすべて非公開で、応募組織の機密の保持には万全を期しております。

受賞者の決定

－10月中旬－

デミング賞委員会が、デミング賞審査委員会からの報告に基づき受賞組織を決定し、受賞組織に通知します。
合格の基準に達しない場合は、決定を保留し、応募組織が辞退しないかぎり継続審査を行います。ただし、継続審査は2回（有効期間は3年）を限度とします。

受賞者の発表

－10月中旬－

上記デミング賞委員会において受賞者を決定後、受賞理由とともに公表いたします。
受賞者は、a)「日本経済新聞」または「日経産業新聞」、b)「日科技連ニュース」（日本科学技術連盟機関誌）、c) クオリティマネジメント Web版、d) 日科技連ホームページ等に掲載されます。
保留となった応募組織については、組織名など一切公表いたしません。

授賞式

デミング賞委員会から賞状およびデミング・メダルが授与されます。
また、実地調査を行った審査委員の審査意見（応募組織の今後のTQM活動に対する提案を含む）をまとめた審査意見書が、応募組織に手渡されます。

受賞報告講演会

授賞式後に、受賞者による報告講演が行われます。

受賞3年後の
フォローアップの
ための調査

受賞後のTQM実施状況について、3年後に簡単な報告書を提出していただきます。
また、原則として、この報告書に基づいて1日の実地調査を行います。

TQMをより一層推進・展開するために上記調査にかえて
a) デミング賞委員会委員によるTQM診断（p.24参照）を受ける
b) デミング賞大賞（旧：日本品質管理賞）を受審することもできます。デミング賞委員会ではこれらへの応募をおすすめしております。詳細につきましては、デミング賞委員会事務局にご相談ください。

☆応募の詳細につきましては「デミング賞応募の手引き」をご覧ください。

* 申込金について

デミング賞の審査は委員のボランティアで行われており、審査料を必要といたしません。事務経費の一部に充当するため、下記の申込金を申し受けます。

調査単位（箇所）が1つの場合：90万円

調査単位（箇所）が2つ以上の場合：90万円に1調査単位あたり20万円が追加されます。

例：調査単位が3つの場合 90万円+20万円×2=130万円となります。

※調査単位につきましては、下記「***実地調査とは」の項をご参照ください。

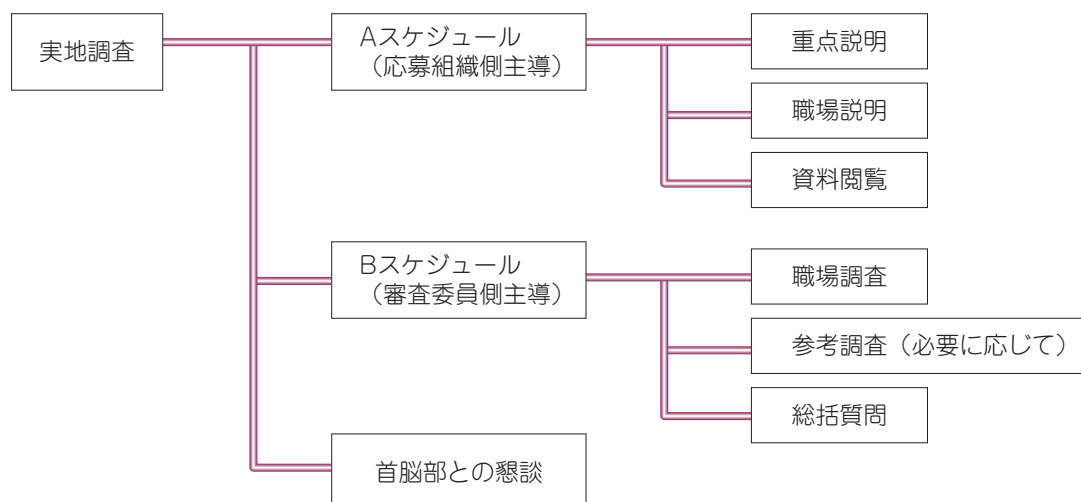
** TQM実情説明書とは

TQM実情説明書は、応募組織における導入から応募に至るまでのTQMの推進・実施状況およびそれによる効果などを記述したもので（A4版、100ページ程度）、実地調査の参考に用いられます。

*** 実地調査とは

実地調査は、審査委員が応募組織の全体の統括管理機能を有する組織、事業部、工場、製作所、研究所、支社、支店、出張所などを訪れ、TQMがどのように行われているかを調査する目的で行われます。調査単位（実地調査の対象として選んだ同一日程で行うひとまとまりの区分）、場所、日時、審査委員数等については、応募組織の希望を参考にして、デミング賞審査委員会がその組織におけるTQM実施状況を調査するのにふさわしいと考える方法に決定いたします。

実地調査は、下図が示すようにAスケジュールとBスケジュールからなっていますが、必要に応じて参考調査をあわせて行います。また、応募組織全体の統括管理機能を有する組織を含む実地調査では、応募組織の首脳部（以下、首脳部という）との懇談を行います。



a) Aスケジュール

応募組織側の主導のもとに行われる調査時間帯で、それぞれのTQM推進における重点活動、その成果ならびに将来計画等、応募組織側が誇りにする点についての重点的な発表をしてもらうことを目的とします。

b) Bスケジュール

審査委員側の主導のもとに行われる調査時間帯です。これは職場調査と総括質問にわかれます。職場調査は、部門別、重点活動別等の区分で、それぞれの職場において行う調査です。実情説明書に記載されている活動、あるいはAスケジュールで説明された活動が、それぞれの職場でどのように実践され、定着しているかを確認することが目的です。また、Bスケジュールの最後には総括的な質疑応答を行います。

c) 首脳部との懇談

TQM推進における首脳部の果たす役割の重要性から、首脳部のTQMに関する理解の程度、熱意、活動の継続性などについての調査を目的として、首脳部との懇談が行われます。

d) 参考調査

実地調査においては、必要に応じて参考調査をあわせて行います。この調査は、応募組織の製品・サービスの提供において、その品質を維持・向上する上で関連の深い組織、例えば、調達関係、業務委託関係、あるいは統括管理関係のある組織などに対して行われる調査で、応募組織のTQMの実施についての評価を行う際に参考とすることを目的としています。

評価基準

評価基準は「基本事項」と「特徴ある活動」と「首脳部の役割とその発揮」の3つから構成されます。

1.基本事項

1.1 評価の項目と配点

評価の項目	配点
1.品質マネジメントに関する経営方針とその展開	20点
a.業種、業態、規模および経営環境に応じた明確な経営方針のもとに、積極的な品質重視・顧客指向の経営の目標と戦略が策定されていること。	(10点)
b.経営方針が組織的に展開され、全組織一丸となって実施されていること。	(10点)
2.新商品の開発及び/又は業務の改革	20点
a.新商品（製品・サービス）の開発及び/又は業務の改革が積極的に行われていること。	(10点)
b.新商品は顧客の要求を満たすものであること。業務の改革の場合は、経営の効率化に大きく貢献しているものであること。	(10点)
3.商品品質及び業務の質の管理と改善	20点
a.日常管理： 標準化と教育訓練により日常業務でトラブルがほとんど発生せず、各部門の主要な作業が安定して行われていること。	(10点)
b.継続的改善： 品質その他に関する改善が計画的・継続的に行われ、市場及び/又は後のプロセスからのクレーム・不良が減少していること。あるいは市場及び/又は後のプロセスからのクレーム・不良が極めて低いレベルに保持されていること。顧客満足度が向上していること。	(10点)
4.品質・量・納期・原価・安全・環境などの管理システムの整備	10点
上記の管理システムで、組織にとって必要なシステムが整備され、有効なものになっていること。	
5.品質情報の収集・分析とIT（情報技術）の活用	15点
市場の品質情報、組織内の品質情報の収集が体系的に行われ、統計的方法、ITの活用とあいまって商品の開発・改善及び業務の質の管理・改善に有効に活用されていること。	
6.人材の能力開発	15点
人材の育成・能力開発が計画的に行われており、商品の品質及び業務の質の管理と改善に役立っていること。	

以上の事項の関連を図示すると次のようになります。

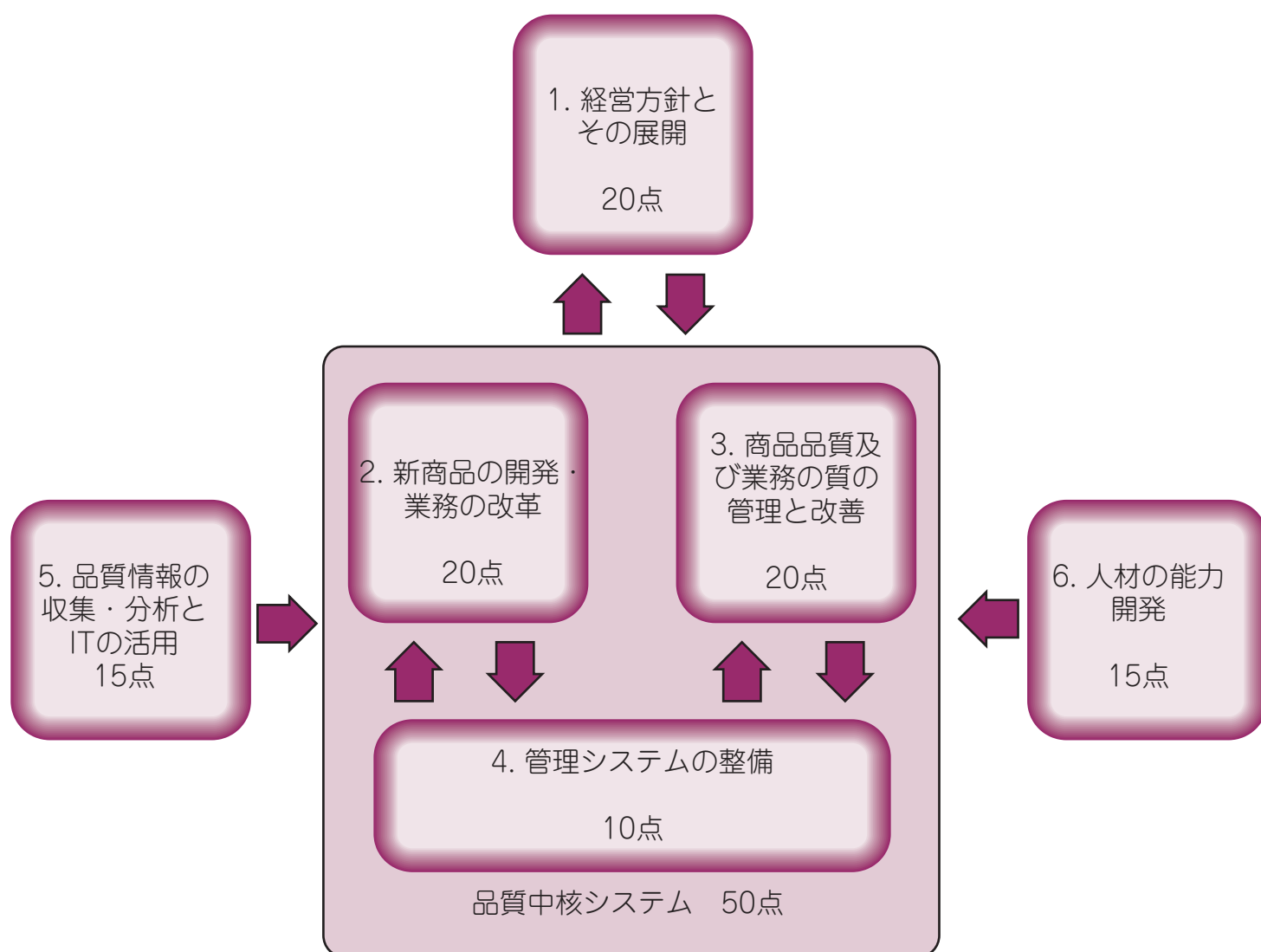


図 デミング賞審査の基本事項の関連と配点

注) ここで示した「事項」と「配点」は一つの基準です。審査に当たっては、応募組織の業態を考慮してデミング賞審査委員会において変更することがあります。

1.2 評価の方法

4つの評価軸に基づいて総合的に評価し、下記レベルにより配点します。

a) 評価軸

- | | |
|--------|--------------------|
| 1) 有効性 | 目的を達成するために有効なこと |
| 2) 一貫性 | 組織的に一貫して矛盾がないこと |
| 3) 継続性 | 中長期的観点から継続性があること |
| 4) 徹底性 | 関係部門で徹底して実施されていること |

b) レベル

レベル	状 態	配 点	
		10点満点の場合	15点満点の場合
1	活動なし	0 点	0 点
2	劣っている	1～3 点	1～5 点
3	普通	4～6 点	6～9 点
4	優れている	7～8 点	10～12 点
5	極めて優れている, 世界のベンチマークとなる	9～10 点	13～15 点

評価事項と評価軸の関連

	有効性	一貫性	継続性	徹底性
1.経営方針とその展開				
方針と戦略（10点）	◎	○	○	…
方針の展開（10点）	○	○	○	◎
2.新商品の開発・業務の改革				
積極性（10点）	○	○	○	○
成果（10点）	◎	…	○	…
3.管理と改善				
日常管理（10点）	○	○	◎	○
継続的改善（10点）	◎	○	○	○
4.管理システムの整備（10点）	○	◎	○	○
5.品質情報の収集・分析とITの活用（15点）	○	○	○	○
6.人材の能力開発（15点）	○	○	○	○

注）表中の「◎」は、評価事項と関係の強い評価軸で評価においては特にこの軸を重視します。
「---」は、評価事項と関係のない評価軸で、この事項の評価においては考えません。

2.特徴ある活動

2.1 特徴ある活動とは

上記「基本事項」の1～6を含めて、組織の発展の中核となる品質活動の中で特に力を入れ、独自の工夫を行って、成果を得ている活動のことです。この活動が少なくとも一つはあること。その例としては、次のような活動があげられます。

トップのビジョン、経営戦略、リーダーシップ

- ・ビジョン価値観を共有するための強力なリーダーシップの発揮
- ・優良組織を実現する経営戦略の策定
- ・優れたビジョンのもとでの組織の変革・改善
 - その業態、組織に適合したユニークかつ効果的な品質の創造・改善のしくみの開発
 - コンカレント・エンジニアリングなど、品質マネジメントシステムのプロセス・イノベーション
 - 海外生産、海外調達において、品質・納期を確実にする生産、購買システムの開発

顧客価値の創造

- 顧客価値を創造する品質マネジメントシステムの開発とそれに基づく製品・サービスの提供
新商品(製品・サービス)開発のための優れた商品企画プロセスの実現
優れた新商品を生み出す研究・技術開発システムの開発
ソリューション・ビジネスにおいて顧客満足を獲得する品質マネジメントシステムの開発

組織のパフォーマンスの大幅な改善

- 品質の向上
- スピード・生産性の改善
品質を確保し、開発日程を大幅に短縮する新製品開発システムの構築
サプライチェーン・マネジメント（SCM）において品質を確実なものにする品質マネジメントシステムの開発
- コストの低減
大幅なコスト低減下での品質を確実なものにする品質マネジメントシステムの開発
- 環境・安全の確保
環境保全、省資源、省エネルギーを組み込んだ品質マネジメントシステムの構築
作業安全、製品安全を重視したマネジメントシステムの構築

組織の経営基盤の確立

- 技術力・コアコンピタンスの強化
品質を重視したコアコンピタンスの充実
技術の深耕に役立つ品質管理手法の開発と展開
- 経営環境の変化への対応
経営環境の変化にフレキシブルに対応できる経営体質の構築
- 人材の能力開発強化
従業員の能力と満足度の向上をはかる人材開発システムの構築
- 情報基盤の整備
情報技術を駆使した、優れた品質マネジメントシステムの構築

その他

- 上に述べた事項以外で特徴ある優れた活動

2.2 評価の方法

「特徴ある活動」の評価は、あらかじめ定められた既存の基準に適合しているかどうかでは行わず、そのパフォーマンスを中心に評価を行います。評価項目に関する細目は定めず、下記1)～3)の評価軸について5点法で評価し、これを総合してあらためて総合評価を5点法で行います。

a) 評価軸

1) 有効性	実際に組織活動として行われ、そのパフォーマンスの向上、発展に寄与していること
2) 再現性	評価の対象は新製品・サービス・新技術そのものではなく、それを生み出す基礎となったマネジメントの方法であること。仕組みとして確立し、他の同様の場面で成果の再現が可能であること
3) 革新性	対象分野でのマネジメントの発展をもたらす革新性があること

b) 評価の基準（各評価軸について）

1 点	なし
2 点	ありとはいいい難い
3 点	多少あり
4 点	あり
5 点	大いにあり

c) 総合評価の基準

1 点	評価できる活動とはいえない
2 点	他で行われている活動とあまり変わらない
3 点	良い活動であるが、特に優れているとはいいい難い
4 点	優れた活動である。中核技術の要素となっている
5 点	極めて優れた活動である。ベンチマークとなり得る

3. 首脳部の役割とその発揮

TQM推進における首脳部の果たす役割の重要性から、首脳部の以下の項目に関する理解、熱意、方針及びその展開、レビューの状況について評価します。

1. TQMに対する理解と熱意
2. トップのリーダーシップ、ビジョン、戦略方針、環境変化に対する識見
3. 組織力（コア技術、スピード、活力の維持と強化）
4. 人材の育成
5. 組織の社会的責任

3.1 評価の方法と基準

評価は懇談の内容と「基本事項」と「特徴ある活動」の審査で得られた知見及び達成されている経営成果を合せて総合的に行い、100点満点とします。

合格判定の方法

1. 基本事項

- a) 1～6について各審査委員が独立に各項目ごとに点数をつけ、合計します。
- b) 各審査委員の合計値のメディアン（中央値）をとり、メディアンの値が70点以上であれば"合格"とします。
- c) b) の条件を満たさない場合で、審査委員の間で点数が大きく異なる場合は、審査委員が集まって各自の点数を開示し、その評価について見直し再検討を行って合否を決定します。

2. 特徴ある活動

- a) 各審査委員は有効性、再現性、革新性について、簡単な理由を付して5点法で点数をつけます。この点数をもとにあらためて総合評価を行い、5点法で総合評価点をつけます。
- b) 各審査委員の総合評価点のメディアンをとり、メディアンの値が3.5点以上であれば"合格"とします。
- c) b) の条件を満たさない場合で、審査委員の間で点数が大きく異なる場合は、審査委員が集まって各自の点数を開示し、その評価について見直し再検討を行って合否を決定します。

3. 首脳部の役割とその発揮

- a) 各審査委員は個別に首脳部との懇談の結果に基づいて、100点満点で評価点をつけます。
- b) 各審査委員の評価点のメディアンをとり、メディアンの値が70点以上であれば"合格"とします。
- c) b) の条件を満たさない場合で、審査委員の間で点数が大きく異なる場合は審査委員が集まって各自の点数を開示し、その評価について見直し再検討を行って合否を決定します。

4. 総合判定

1) 調査単位が1つの場合

「基本事項」、「特徴ある活動」、「首脳部の役割とその発揮」のいずれもが合格である場合に、"合格"とします。

2) 調査単位が2つ以上ある場合

応募組織全体の統括管理機能を有する組織を含む調査単位は上記による合否の評価、それ以外の調査単位は「基本事項」「特徴ある活動」により合否の評価を行い、合格の調査単位は評点1、不合格の調査単位は評点0を与えて、評点の重み付き平均値を求め、この値が0.5以上であれば合格とします。

なお、応募組織に社会的非難を受けるような行為があったと判断される場合には、合否の判定を行わないことがあります。



デミング賞は、これまでに、約200の組織がこの賞にチャレンジして受賞し、その結果、製品・サービス等の品質を飛躍的に向上させるなど多大な効果をあげています。日本で誕生した品質管理の賞ですが、現在では世界的にも高い評価を得ています。以下に、期待できる「効果」と、実際に受賞された組織のトップのことばを紹介します。

期待できる効果

(1) 品質の安定・向上

全社的に品質の考え方、管理の考え方が浸透し、これらの考え方にもとづいて日常業務が遂行されるとともに、統計的品質管理の手法が活用され、品質保証体制が整備されます。これらの活動が品質意識の高揚と相まって、顧客の要求と企業の経営方針にマッチした適切な品質の製品・サービス等を企画し、開発・設計し、製造し、施工し、顧客に提供できます。その結果、開発・設計トラブル、部品不良、製造不良、施工不良、サービス不良、市場クレームの低減が図られるとともに、当り前品質が確保され、顧客を積極的に満足させる魅力的品質の備わった製品・サービスの提供ができるようになります。また、信頼性の確保、安全性の向上、社会的品質の確保にも成果をあげております。そうして世界一流の名声を獲得した組織も相当数輩出しております。

このような品質の向上は、顧客に喜んでもらうとともに、次の(2)、(3)、(4)に示す経済的效果、さらには、(4)から(10)に示す組織の体質改善上の効果をももたらしています。

(2) 生産性の向上／コストの低減

新製品開発段階における開発・設計トラブルの低減、協力企業におけるTQMの推進により、部品不良の低減あるいは部品不良による工程トラブルの減少、製造段階における製造不良ならびに手直し・調整作業の低減、建設業における施工不良の低減ならびにサービス産業における顧客満足の向上などにより、大きな効果があげられています。さらに、新製品開発における原価作り込みを組織的に行うことにより、競争力のある原価目標の実現が図られています。また、生産管理システムの整備および工数低減活動などにより、生産性の向上も図られています。

(3) 売上の拡大

顧客の要求を満たす、あるいは顧客の要求を先取りした、競争力のある新製品の開発を体系的に行うことにより、顧客の満足を得て、その結果として、売上の拡大が図られています。また、初期流動管理の充実、さらには営業活動へのTQMの展開により、新しい顧客・市場の獲得、品切れの防止等が図られ、この面でも売上の拡大につながられています。

(4) 利益の向上

上の(3)で述べた売上の向上、(2)で述べたコストの低減を組み合わせることにより、利益の向上が図られます。もちろんTQMを推進するためには、教育費用、専任推進スタッフの人件費、諸行事の費用等が必要となります。これまでの多くの組織における実績で、TQMの推進による成果は、これらの費用に比して十分に高い効果をあげていることがわかってきています。

(5) 経営計画／事業計画の確実な遂行

利益確保のためには、利益計画を中心とした経営計画／事業計画の遂行が重要で、品質管理も当然この一環として行われるべきものでありますが、方針、目標の合理的設定には、過去の実績の把握ならびに解析が必要であり、さらにその効率の達成のためには、方針展開、実施、実績評価が必要となり、その具体的手段として、TQMの組織運営法の一つである方針管理が広く導入され、推進されています。このような体系的な進め方により、経営計画／事業計画の効率的な達成が図られています。

(6) トップの夢の実現

組織内には過去の因習、仕事のしたきり、固定観念、人間関係の複雑さなどが多かれ少なかれ存在するのが現実であり、組織構成員全体へのトップの意思伝達と実行には困難をとまなうことも稀ではありません。デミング賞獲得という高い目標を掲げ、期限を決めてTQMを推進することにより、組織の体質改善を図るという組織が多く見られます。このような組織のトップの方々より、

「自分達が日ごろやりたいと思っていた多くの懸案が一挙に実現できた」

という喜びの声も寄せられております。品質管理が企業全体に浸透し、トップの方針が迅速に末端まで行きわたり、それがどんどん実現できるようになれば、工場長、部課長などの管理者層、さらには職組長や作業員層までも、経営に対する認識が高まるとともに連帯意識も深まり、次期経営者や中堅幹部の育成ができることになります。

「私は、社長を永年やっていますが、社長方針がこのように達成できたことはありませんでした」という感想もあります。

(7) 全員参加の品質管理と企業の体質改善

デミング賞を受賞された多くの組織のトップの方々は、

「デミング賞に応募するまでの過程で、全社一丸となって製品・サービスの品質を中心に企業の体質改善を行ったことにともない、セクショナリズムが打破され、各部門の風通しがよくなり、部門間の壁がなくなり、連帯意識が増し、全員が全社的な立場でものを考えるようになり、自信をもって仕事ができるようになった」と強調されています。また、「全員が協力すれば組織として達成不可能なものはないとの自信をもつようになり、横の連絡や機能別管理がうまくいくようになりました」

という感想をもらしている経営者もいらっしゃいます。

(8) 管理・改善意欲の向上と標準化の推進

「各人の科学的管理の考え方、ものごとに対する客観的な把握の仕方が向上し、自主的に問題が解決できるようになり、みずから考える力を養うことができるようになり、改善提案が急増し、例えば年間一人あたりの提案件数が大幅に増加した」という組織もあります。また「形式に墮することなく効果に結びついた標準化が推進され、生きた標準類の全社的な整備に大きく寄与しました」と喜んでおられる組織もあります。

(9) 下部層からの大きな力の集結とモラルの向上

近年QCサークルが世界的に注目されています。これは単なる精神運動ではありません。

QCサークル活動（小集団改善活動）が活発化した組織では、職組長や作業員が簡便な管理や解析の技術を習得し、仕事に大きな興味をもち、日常の改善や仕事の管理が自主的、合理的に行われるようになります。組織の構成員一人ひとりの努力の集積がどのような大きな力を生み出すかについては、あらためて説明を要さないと思います。職場に出勤するのが楽しくなり、出勤率も向上していきます。この力が組織の発展をうながし、よりよい労使関係の根源を作り、モラルが向上して、全従業員の能力のレベルアップに大きく貢献していきます。これによってスタッフの本来の仕事も明らかとなり、スタッフをより大きな改善業務に集中させていくことができます。

(10) 管理システムと総管理体制の確立

以上のように、TQMを通じての科学的管理活動が全社に浸透し、真の体質改善に結びついてきます。品質保証システムを始めとし、新製品開発管理、利益管理、原価管理、納期管理、外注管理に加えて、その他の各種機能別管理システムも整備され、それらを結びつけた総管理体制ができるようになります。また、組織内における各自の行動の基準が明らかになり、責任と権限が明確になり、それにとまって組織が合理化されます。

以上のように、デミング賞を受けなくては達成しえないと思われるような大きな成果をあげております。あなたの組織でも体質改善のために勇気をもって計画的に、積極的にデミング賞に応募されることをおすすめしたいと思います。

受賞による効果－受賞組織のトップのことば（順不同）

（受賞の言葉と役職は受賞時のものです）

アイシン精機株式会社 相談役 相木 茂男 氏

（1972年度デミング賞実施賞，1977年度，1990年度日本品質管理賞受賞）

『為せば成る』これは、私が常に我が心に言い聞かせている言葉です。

当社は1972年にデミング賞実施賞（以下デ賞）を、そして1977年と1990年には日本品質管理賞（以下N賞）を受賞しています。特に、私が推進委員長をつとめた1990年のN賞は、当社が史上初の2度目の受賞であっただけに大きな喜びでした。

私は、経営者の方々に、ビジョンを達成するために努力している日頃の活動を「そのまま評価してもらう」ということで、デ賞やN賞を受審することをお薦めします。そうすることにより、『為せば成る』の言葉通り、次に述べます三つの成果につながると確信しています。

- （1）「デ賞，N賞への挑戦」を合い言葉に、全従業員の力が結集できる。
- （2）ビジョン達成に向けた活動が「審査までに遂行する」ということで加速される。
- （3）第三者の的確な指摘が「意見書」という形で得られ、今後の計画に反映できる。

サンデン株式会社 代表取締役会長 牛久保 雅美 氏

（1998年度デミング賞実施賞，2002年度日本品質管理賞受賞）

私は「質」を高める事は永年の地道な努力によって出来るものであると考えています。

中国の言葉に「百年の計は人を植うるに如くはなし」と云われる通り、人の質の向上は長年の教育*にあります。企業の「経営品質」，製造業の「製品品質」等はデミング賞を核としたSQC，TQC，TQMの思想，技術，手法を用い、一步一步積み重ねた結果保証されるものであると思います。

昨今、日本の製造業の品質について危機を問われているのは、SQC，TQC，TQMの基本が忘れているからではないのでしょうか？

現在の日本の製品の品質は10年，20年前の品質活動によって成されているものであり、この品質の継承は、飽くなき品質活動の継続努力により維持されるものと信じています。

（*故石川 馨先生曰く「品質管理は教育に始まり教育に終わる」）

**株式会社ジーシー
株式会社ジーシーデンタルプロダクツ**

代表取締役社長 中尾 眞 氏

(株式会社ジーシー：2000年度デミング賞実施賞，2004年度日本品質管理賞受賞)
(株式会社ジーシーデンタルプロダクツ：
2003年度デミング賞実施賞受賞，2006年度日本品質管理賞受賞)

TQMは顧客・品質第一主義を基本として，QC的思考方を中心とした全員参加の経営とアクションを日本の産業界に普及させ，現在日本は世界最強製造業の再興に成功した。

当社は1981年創業60周年を機にTQMを導入し，TQMを経営管理手法の核としたビジョン経営のもと，GCグループ各企業に展開を図ってきた。特に90年代後半から，企業は環境の変化に適応し，たゆまぬ成長を続けなければならないとの考えのもとに，TQM活動を強化しデミング賞を受賞する事ができた。

この結果，

(1)プロセスで仕事を進める

(2)トップマネジメントを中心に中期的なものの見方を身につける

(3)「なかま」(社員)の力の結集によるたゆまぬ改善を積み重ね，なかまの人財力アップをはかる等の効果をあげる事ができ，「なかま」一人ひとりのDNAとして継承されている。また現在では，デミング賞審査後に頂戴する事が出来る第三者としての真摯な「意見書」の教えを反映した5ヶ年中期経営計画を実行に移し，より次元の高い品質経営を実践し，CSR・ブランド力構築に大きな原動力となっている。

株式会社メイドー 代表取締役社長 長谷川 裕恭 氏

(2010年度デミング賞実施賞受賞，2013年度デミング賞大賞受賞)

1985年のTQM(当時，TQC)導入以来，継続的改善活動が企業風土として定着しています。1999年に社長就任以来，業界No.1を目指していますが，この高い目標を達成するには社員の革新意識の向上が不可欠です。

全社をあげたデミング賞への挑戦活動で，顧客先品質不良が1/5に減少しましたが，それは社員の品質意識が向上し，又，よい仕組みで仕事をするようになり，そして，統計的解析手法を活用するようになったからです。その結果，業界No.1の達成も夢ではないと確信できるようになりました。又，PR効果も高く，多くのお客様が工場見学に来社されています。

今，日本はバブル崩壊以降，経済成長が低迷し，国民に閉塞感が漂っています。しかし，これから企業の大小を問わず経営者と社員が奮起し，高い経営目標を掲げ，デミング賞を目指して活動すれば，日本は再成長ができると確信しています。

Sundaram - Clayton Ltd. Mr.C.Narasimhan , president

(1998年度デミング賞実施賞, 2002年度日本品質管理賞受賞)

We wanted to change to new way of working to overcome the recessionary years of late 80s', tackle emerging competition and to improve the profit performance of the company. We decided to implement the Japanese way of TQM, as it was congruent with our company culture. Also, we found similarity between the Japanese culture and Indian culture like Guru-Student relationship.

We stressed the importance of change to all the employees through change seminars and also through every possible platform of communication. We removed all visible barriers to bring employees closer and to develop team working. We trained our employees in statistical tools and our employees started to approach a problem statistically and not intuitively. The employees participate in problem solving and continuous improvement through Quality control circles /Suggestion scheme/Cross functional teams (CFT)/Supervisory improvement teams (SIT) and Task forces.

We have streamlined our daily activities through daily management with standard operating procedures (SOP) and 'Genba' management. The daily management targets are deployed up to the supervisor level in the company through 'Managing points and Checking points'(MPCP). Specific objectives for obtaining breakthrough results are established, deployed and reviewed company-wide through policy management process.

Some of the tangible and intangible benefits we achieved through TQM are:

- Improved customer satisfaction
- Improved new product development process
- Improved customer quality
- Supplier satisfaction
- Employee/Family fulfillment
- Excellent Industrial relations
- Change in organisational culture - high ownership among employees for improving organizational performance
- Breakthrough achievements in business results
- Satisfied local society

We decided to challenge the Deming Prize to encourage our employees to achieve higher standards and also to motivate them.

After successfully winning the Deming prize in 1998, we continue to improve our performance namely: 100% employee participation in Quality control circles consecutively for the last two years and 100% participation in Suggestion (TEIAN) scheme during the last year. We have been certified for QS9000 quality systems in August 2000 and ISO 14001 environmental management systems in August 2001.

Deming prize is not our destination and we believe that it is only a ticket for TQM journey towards organisational excellence. We have embarked further improvement in our performance: Improvement in product quality, improving productivity and reducing cost-through achieving 100 ppm quality, implementing lean manufacturing systems and Total Productive Maintenance (TPM).

(4)

日経品質管理文献賞

日経品質管理文献賞とは

日経品質管理文献賞は、「TQM」またはそれに利用される統計的手法等の研究に関する文献（数値表やソフトウェアをとまなう文献を含む）で、品質管理の進歩、発展に貢献すると認められる優秀なものを表彰するため、1954年に日本経済新聞社によって創設されました。この賞の審査はデミング賞委員会において行われ、デミング賞行事の一環として毎年賞の授与が行われています。

受賞者には日本経済新聞社から賞状が授与され、賞金40万円（授賞件数により分割）が贈呈されます。

推薦または応募の資格

日経品質管理文献賞は、日本語で書かれた文献、または、日本を主たる活動の場としている著者の文献で、次に掲げる文献の作成者に授与されます。

- a) 「TQM」またはそれに利用される統計的手法等の研究に関する文献（数値表やソフトウェアをとまなう文献を含む）で、品質管理の進歩、発展に貢献すると認められるものを対象とします。
- b) 対象文献は、原則として、前年の7月1日から当年の6月30日までに公表されたものです。

注）ソフトウェアをとまなう文献は、過去3年以内に出版され、汎用性、有効性、独創性に優れ、入手が容易なものを対象とします。

注）翻訳文献は対象となりません。

注）出版関係者からの推薦は受け付けておりませんのでご注意ください。

推薦・応募方法

締め切り：7月31日

巻末の推薦（応募）用紙に所要事項をご記入の上、当該文献を添えて、提出してください。

推薦・応募の締め切りは、7月31日です。

審査

推薦と応募とでは審査の上での差別はありません。

日経品質管理文献賞選考委員会で受賞候補者を審査・選定し、デミング賞委員会に報告します。

受賞者の決定

－10月中旬－

デミング賞委員会が、日経品質管理文献賞選考委員会からの報告にもとづき受賞者を決定し、受賞者に通知します。

受賞者の発表

－10月中旬－

上記デミング賞委員会において受賞者を決定後、受賞理由とともに公表いたします。

受賞者は、

- a) 「日科技連ニュース」（日本科学技術連盟機関誌）
- b) クオリティマネジメントWeb版
- c) 日科技連ホームページ

ほか新聞等に掲載されます。

授賞式

－11月中旬－

日本経済新聞社から賞状ならびに副賞（賞金）が授与されます。

6.デミング賞委員会委員によるTQM診断

TQM診断とは

TQMを推進する上で、その現状をチェックし、効果的な推進を図るため、外部からの客観的な診断にもとづき助言を受けることは有意義なことです。デミング賞委員会では、1971年度よりこの観点から組織の希望に応じてTQM診断を実施し、TQMの一層の発展に役立たせるようにしています。

TQM診断は、デミング賞等の予備審査ではありませんが、2000年度から実地調査との結びつきを強化いたしました。なお、診断を受けた年には、デミング賞等に応募することができないことになっています。また、デミング賞委員会委員によるTQM診断は、受審単位、受審範囲、受審組織などの変更により委員会に認められた場合を除き、デミング賞・デミング賞大賞それぞれの受審に対して1組織あたり2回以上の実施はできないことになっています。

実施の方法

TQM診断は、組織に対して一層効果的なTQMの推進に資することを目的とし、下記のような段階に応じて行われます。診断を希望する組織は、このうちのいずれかを指定し、デミング賞委員会あてに希望日の3カ月前までに巻末の申し込み用紙に所定事項をご記入の上、所定の資料を添えて提出してください。ただし、原則としてデミング賞の審査が行われる期間（7月上旬～10月中旬）には診断を行いません。

- a) TQMの導入または推進期において診断を実施し、助言します。
- b) デミング賞等を受審する方向で診断を実施し、助言します。
- c) デミング賞ならびにデミング大賞（旧：日本品質管理賞）受賞3年後のフォローアップのための調査に代えて診断を実施し、助言します。

TQM診断は、デミング賞審査委員会委員が行います。

診断のプログラムの詳細は、受診組織側と相談して決定しますが、診断方法、診断で使用する資料等はデミング賞の審査に準じます。原則として受診組織側の説明、職場調査、資料調査および質疑応答により行い、診断終了後に簡単な講評をいたします。また、診断結果は各委員の意見を診断報告書にまとめてお渡しします。診断を希望する組織はデミング賞委員会事務局にご相談ください。

費用

診断費、診断報告書作成費、交通費、宿泊費、事務費などを負担していただきます。



デミング賞に関する諸規定



デミング賞各賞に関する諸規定

デミング賞各賞規定（1951年制定，1972年3月，1978年10月，1982年10月，1986年10月，1989年10月，1994年10月，1998年10月，2008年10月，2009年10月，2011年10月，**2013年10月**改定）

1. デミング賞は，統計的品質管理の方法の工業への応用について指導のため，1950年来日された故W. E. デミング博士の友情と業績を記念するために日本科学技術連盟理事会の議決にもとづき1951年に設けられたものである。
2. デミング賞各賞は，デミング賞本賞およびデミング賞普及・推進功労賞（海外），デミング賞（従来のデミング賞実施賞）よりなり，次の区分により授賞する。
 - (a) デミング賞本賞
 - (1) 総合的品質管理（Total Quality Management，以下TQMという）の研究に關しすぐれた業績のあった者
 - (2) TQMの普及に關しすぐれた業績のあった者
 - (b) デミング賞普及・推進功労賞（海外）

TQMの普及・推進に關し，優れた業績のあった者

ただし，候補者は，主たる活動が海外に限定される者に限られる
 - (c) デミング賞（従来のデミング賞実施賞）

その年度において経営理念，業種，業態，規模，経営環境にふさわしいTQMが効果的に実施されている組織
3. デミング賞に授与する賞および副賞は次のとおりとする。
 - (a) デミング賞本賞

賞状，デミング・メダルおよび副賞として賞金
 - (b) デミング賞普及・推進功労賞（海外）

賞状，デミング・メダル
 - (c) デミング賞（従来のデミング賞実施賞）

賞状，デミング・メダル
4. デミング賞のために必要な経費は，応募組織からの申込金・協力金および一般財団法人日本科学技術連盟（以下，日科技連という）の支出などをもってこれにあてる。
5. デミング賞の授賞は原則として毎年これを行う。ただし，デミング賞普及・推進功労賞（海外）は**原則として3～5年毎に選考が行われます。**
6. デミング賞各賞の審査および授賞を行うため，デミング賞委員会をおく。本委員会はデミング賞のほか品質管理に関する審査および授賞を行うことができる。
7. デミング賞委員会の委員長は日科技連の会長または日科技連理事会の推薦する者がこれにあたる。
8. デミング賞委員会の事務は日科技連事務局において処理する。
9. デミング賞委員会の規定は別に定める。
10. **2013年10月**の改定は**2014年1月1日**から適用する。

デミング賞委員会規定 (1951年制定, 1973年3月, 1978年10月, 1982年10月, 1986年10月, 1994年10月, 1998年1月, 1998年10月, 2007年10月, 2008年10月, 2009年10月, 2011年10月改定)

〔デミング賞委員会の設置〕

1. デミング賞各賞規定にもとづきデミング賞委員会（以下委員会という）を設ける。
2. 委員会は、一般財団法人日本科学技術連盟（以下、日科技連という）におく。

〔委員会の任務〕

3. (a) 委員会は、デミング賞の審査および授賞にあたる。
(b) 委員会は、デミング賞大賞（従来の日本品質管理賞）規定に定めるデミング賞大賞（従来の日本品質管理賞）の審査および授賞にあたる。
(c) 委員会は、日経品質管理文献賞規定に定める日経品質管理文献賞の審査および授賞にあたる。
(d) 委員会は、委員会の委員によるTQM診断の業務を実施することができる。
4. 委員会は次の各号の業務を行う。
(a) デミング賞各賞（デミング賞本賞、デミング賞普及・推進功労賞（海外）、デミング賞（従来のデミング賞実施賞））の募集方法の決定ならびにその審査および受賞者の決定を行うこと。
(b) デミング賞大賞（従来の日本品質管理賞）の募集方法の決定ならびにその審査および受賞者の決定を行うこと。
(c) 日経品質管理文献賞の募集方法の決定ならびにその審査および受賞者の決定を行うこと。
(d) デミング賞各賞（デミング賞本賞、デミング賞普及・推進功労賞（海外）、デミング賞（従来のデミング賞実施賞））、デミング賞大賞（従来の日本品質管理賞）および日経品質管理文献賞の授賞を行うこと。
(e) デミング賞、デミング賞大賞（従来の日本品質管理賞）および日経品質管理文献賞の受賞者を公表すること。
(f) 委員会の委員によるTQM診断の業務を実施すること。
(g) デミング賞各賞規定、デミング賞大賞（従来の日本品質管理賞）規定および日経品質管理文献賞規定ならびにこれらに関する規定を改廃すること。
5. 委員会はデミング賞（従来のデミング賞実施賞）およびデミング賞大賞（従来の日本品質管理賞）の受賞者に対し、その後の状況について報告を求めることができる。委員会はその報告にもとづき委員を派遣して実状を調査することができる。

〔委員会の構成〕

6. 委員会は、委員長および委員をもって構成する。
7. 委員長は、デミング賞各賞規定の定めるところにより日科技連会長または日科技連理事会の推薦する者がこれにあたる。
8. 委員会には副委員長をおくことができる。
9. 委員会には名誉委員長をおくことができる。
10. 委員は、総合的品質管理（Total Quality Management, 以下TQMという）またはそれに利用される統計的手法等に関係ある学識経験者、企業の役職員その他の者について委員長が委嘱する。

11. 委員会に顧問をおくことができる。顧問はTQM等の実施または普及などに特に功績のあった企業の役員および学識経験者などについて委員長が委嘱する。
12. 日科技連の会長または日科技連理事会の推薦する者が委員長となった場合の委員長の任期は就任の日から2年間とする。
13. 委員、顧問の任期は、毎年1月1日から12月31日までの1年とする。ただし、特に必要と認められる場合には、その任期を特定の期間とすることができる。
14. 委員長が必要と認めるときは、臨時委員および委員補佐を委嘱することができる。
15. 委員会にセクレタリー1名をおく。セクレタリーは日科技連事務局長がこれにあたり委員会の事務を統括する。

〔委員会の組織〕

16. 委員会はその業務を分担審議するために次の各委員会を設けることができる。
17. 委員会は次の4委員会とし、その業務は次のとおりとする。なお、各委員会の組織運営については別に定める。

運 営 委 員 会：運営および総合企画、基本理念・基本戦略の策定を行う。

デミング賞の諸事業の調整と審査、褒賞などの改善などに対し広く意見を聞き委員会に報告する。

デミング賞に関する規定やシステムなどを検討し、必要な改正を委員会に提案する。

※従来の総合調整小委員会、制度小委員会の機能は、運営委員会に統合。

デミング賞本賞選考委員会：委員会の諮問により、デミング賞本賞およびデミング賞普及・推進功労賞（海外）受賞候補者の選定を行い、委員会に報告する。

デミング賞審査委員会：委員会の諮問により、デミング賞（従来のデミング賞実施賞）、デミング賞大賞（従来の日本品質管理賞）の受賞候補者の審査を行い、委員会に報告する。

またデミング賞審査委員会の委員によるTQM診断の業務を行う。

日経品質管理文献賞選考委員会：委員会の諮問により、日経品質管理文献賞受賞候補者の審査を行い、委員会に報告する。

18. 17項の4委員会の委員長は、委員会委員のうちから、また17項の4委員会の委員は、委員会委員、臨時委員および委員補佐のうちから、委員会委員長が委嘱する。

〔委員会の運営〕

19. 委員会は委員長が招集する。
20. 委員会は委員総数の半ば以上の出席をもって成立する。ただし、委任状をもって出席にかえることができる。
21. 委員会の議決は多数決とする。ただし、賛否が同数の時は委員長の決定するところによる。
22. 委員長に事故があるとき、または、委員長が欠けたときは、副委員長またはあらかじめその指名する委員がその職務を代理する。

23. 顧問，臨時委員および委員補佐は委員会に出席し，発言することができる。ただし，議決権を有しない。
24. 委員会の議決事項および議事録は，委員会の事務を処理する日科技連事務局がこれを作成し，保管する。
25. 17項の4委員会の運営は委員会の運営に準じて行う。
26. 2011年10月の改定は2012年1月1日から適用する。

デミング賞（従来のデミング賞実施賞）の運営に関する規定

（1984年制定，1989年10月，1994年10月，1996年10月，2009年10月，2011年10月改定）

1. デミング賞（従来のデミング賞実施賞）は，日本国内における同賞の審査実施計画に余力のある場合に限り，国際協力の見地から，日本以外の国の組織に対しても応募を認め，審査，授賞を行うことができる。
2. 外国の応募組織に対しては，意見書作成費，審査委員および事務局職員の旅費，日当，宿泊費等のほか，通訳費，通信費等の負担を求めることができる。

日経品質管理文献賞規定

（1954年制定，1975年3月，1984年1月，1989年10月，1998年10月，2011年10月改定）

1. 日経品質管理文献賞（以下文献賞という）は，統計的品質管理に関する優秀文献を表彰するため1954年日本経済新聞社によって創設されたものであり，この規定によって実施する。
2. 文献賞は次の3. に掲げる文献の作成者に授与するものとする。
3. 文献賞の対象となる文献は，総合的品質管理（Total Quality Management，以下TQMという）またはそれに利用される統計的手法等の研究に関する文献（数値表またはこれに準ずるものを含む）で，品質管理の進歩発展に貢献すると認められるものとし，毎年指定された期間内に公表されたものとする。
4. 前項の指定された期間は「デミング賞のしおり」（以下，しおり等という）に掲載する。
5. 文献賞候補者の募集は次の手続による。
 - (a) 推薦または応募による。
 - (b) 推薦（応募）は，しおり等に掲載されている様式によって原則としてその文献ならびに必要な資料を添付してデミング賞委員会に対して行う。
 - (c) 推薦（応募）の締切日は，しおり等に掲載する。ただし，デミング賞委員会日経品質管理文献賞選考委員会の承認がある場合は，締切日後も受け付けることができる。
 - (d) 出版関係者からの応募は受け付けない。
6. 文献賞の審査は，デミング賞委員会が行う。
7. 文献賞の賞状および賞金（または賞牌）は，日本経済新聞社が授与する。
8. 文献賞の授賞の数および賞金（または賞牌）の金額は毎年デミング賞委員会が日本経済新聞社と協議して定める。
9. この規定に関する解説は，しおり等に掲載する。
10. 文献賞の事務は，デミング賞委員会の事務の一部として一般財団法人日本科学技術連盟事務局において処理する。
11. 2011年10月の改定は2012年1月1日から適用する。

応募・推薦申込書

デミング賞の申込書は「デミング賞応募の手引き」にあります。

デミング賞に応募される場合には必ず同手引きをご覧ください。



2014年度

デミング賞本賞推薦書

2014年 月 日

デミング賞委員会委員長 殿

2014年度デミング賞本賞について下記の通り推薦します。

推薦者・デミング賞委員会委員

㊞

候補者 氏 名

所 属

自宅住所

賞の対象となる業績

1) 件 名

2) 推薦理由

(裏面余白もご使用ください)

注)

- 1) 推薦理由は概要を簡明に記入してください。
- 2) 報文、著書などのコピーや参考とすべき業績の記録などは必ず提出してください。
ただし、添付資料はA4版3枚以内にしてください。

2014年度

デミング賞普及・推進功労賞（海外）推薦書

2014年 月 日

デミング賞委員会委員長 殿

2014年度デミング賞普及・推進功労賞（海外）について下記の通り推薦します。

推薦者・デミング賞委員会委員

㊞

候補者 氏 名

所 属

自宅住所

賞の対象となる業績

1) 件 名

2) 推薦理由

(裏面余白もご使用ください)

注)

- 1) 推薦理由は概要を簡明に記入してください。
- 2) 報文、著書などのコピーや参考とすべき業績の記録などは必ず提出してください。
ただし、添付資料はA4版3枚以内にしてください。

2014年度

日経品質管理文献賞推薦（応募）申込書

2014年 月 日

デミング賞委員会委員長 殿

2014年度日経品質管理文献賞について下記の通り推薦（応募）します。

推薦者
(応募者)

印

連絡先：所属：

住所：

TEL：

文献作成者 氏 名

所 属

自宅住所

賞の対象となる文献

1) 件 名

2) 発行年月日

3) 発 行 所

4) 推薦（応募）理由

(裏面余白もご使用ください)

注)

- 1) 推薦（応募）理由は概要を簡明に記入してください。
- 2) 推薦（応募）の対象となる文献は必ず提出してください。

T Q M 診 断 申 込 書

2 0 1 4 年 月 日

デミング賞委員会委員長 殿

所 在 地

組 織 名

代表者名
(または部門長名)

印

デミング賞委員会委員によるTQM診断を下記の通り申し込みます。

1.希望時期： 年 月 { ☐土曜実施可
☐日祝実施可
☐土日祝実施不可

2.受診を希望する組織： (日 数) (委員数)

3.目 的

p.24目的 a) ～ c) のうち _____を希望します。

連絡担当者 (所属, 電話, FAX, E-mail)

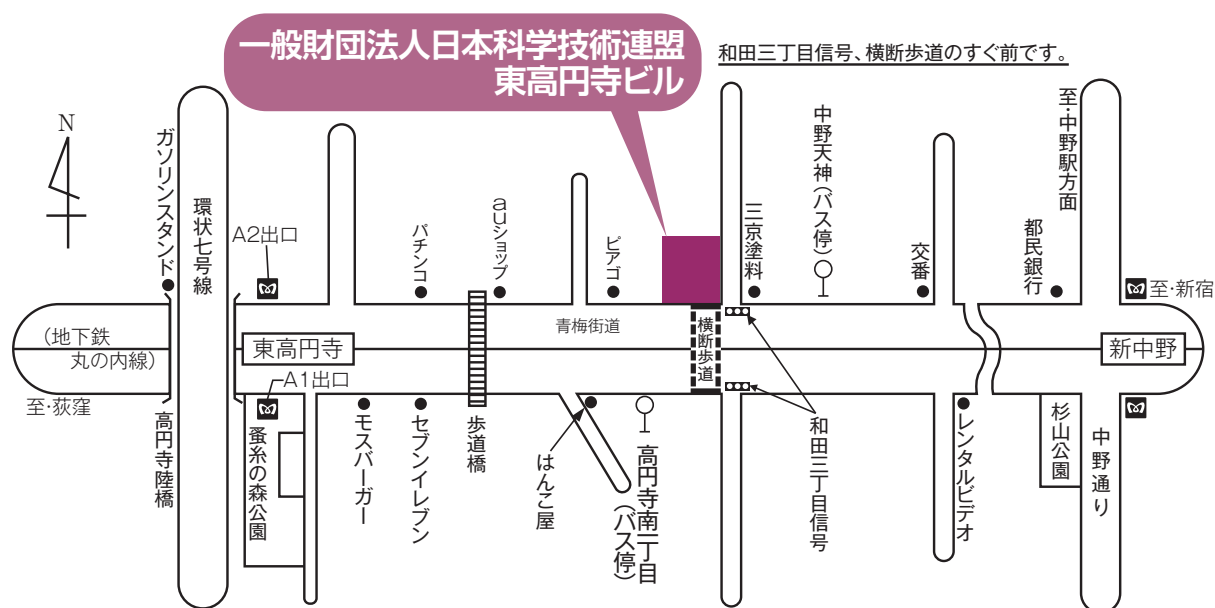
注) 申込書に全社および診断組織の概要説明資料 (含組織図) を添付してください。

お問い合わせ先

デミング賞に関するお問い合わせは、下記デミング賞委員会事務局へどうぞ。

〒166-0003 東京都杉並区高円寺南1-2-1
 一般財団法人 日本科学技術連盟内
 デミング賞委員会 事務局
 電話 03-5378-1212 (平日9:00~17:00)
 F A X 03-5378-9842
 E-mail demingprize@juse.or.jp
 U R L <http://www.juse.or.jp/prize/>

ご案内略図



●東京メトロ・丸ノ内線「東高円寺」駅下車・徒歩5分

☆新宿駅から：地下鉄・丸ノ内線「荻窪行」に乗換え約10分

(JR中央線「荻窪」駅で地下鉄・丸ノ内線に乗換え約5分)

☆東京駅から：丸ノ内線で地下鉄・丸ノ内線「荻窪行」に乗換え約30分

☆上野駅から：山の手線で秋葉原へ→総武線に乗換え

(新宿方面)、「四谷駅」で地下鉄・丸ノ内線「荻窪行」に乗換え約40分または「新宿」駅で乗換え

注：地下鉄・丸ノ内線に東京、四谷、新宿方面からご乗車の場合、「荻窪行」にご乗車ください。

デミング賞委員会

一般財団法人 日本科学技術連盟内
〒166-0003 東京都杉並区高円寺南1-2-1
電 話 03-5378-1212
F A X 03-5378-9842
E-mail demingprize@juse.or.jp
U R L <http://www.juse.or.jp/prize/>